

日本労働年鑑 第25集 1953年版  
The Labour Year Book of Japan 1953

第一部 労働者状態

第六編 農家の状態と農民の生活

第二章 農家経済と農民の生活状態

第二節 家計費

五一年度の一戸当平均(北海道をのぞく全国)農家の家計費は、現金で一・二、八九七円であり、現物をふくめたその総額は二〇五、〇五九円である(第一八五表参照)、この現金・現物合計の家計費の内訳を見るに、飲食物費が一・三、二六四円で総額の五五・二%をしめている。昨年度の飲食物費は九一、六七四円で、エンゲル係数は五六・〇であったのに比べ、わずかではあるが、家計費中にしめる飲食物の比重が減少している。

つぎに被服費が二五、七二三円で一・二・五%をしめているが、これは昨年度の一・二%に比べ増加している。被服費の比重は四八年当時にくらべ減少しているが、最近はずかながら増加傾向にあることは注目される。被服費について大きな支出は住居費で本年度は一・三、四一三円、六・五%となっている。家計光熱費は一・一、五六八円(五・六%)で、この費目は昨年度にくらべ約〇・八%の減少をしめた。学校教育費は四、三六三円で昨年度とその比重は変わらないが、このような僅少な教育費も農家にとっての負担は決して軽くないのである。修養娯楽費が四、五五六円(二・一%)で、一ヵ月平均四〇〇円にも満たないのは、農民の文化生活と教養の水準がいぜんとして抑圧されていることを物語るものである。

以上みたように、本年度の農家経済は昨年度にくらべ、より大きな黒字を出しながら、その家計内容はほとんど変化していないことがわかる。エンゲル係数がわずかに低下したことはたしかに一つの変化ではあるが、全体として農家の生活内容が向上したとみとむべき徴候はみとめることができない。

日本労働年鑑 第25集 1953年版

発行 1952年11月15日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2000年8月10日公開開始